

終助詞「ね」「よ」「よね」の談話上における機能分析

——コーパス・データの母語場面の会話を中心に

The Functions of the Sentence-final Particles 'ne', 'yo', and 'yone' on Discourses in Native Japanese Conversations: A Corpus Data Study

崔 英才
CUI Yingcai

要旨 本研究では終助詞研究における新たなアプローチを模索するために、母語場面の自然会話をデータに、文末に付く「ね」「よ」「よね」を取り上げ、文法的側面のモダリティ機能から出発し、新たな視点として発話連鎖の特徴に注目し、談話上における機能として機能分類を行った。結果、終助詞「ね」「よ」「よね」は命題内容の事柄の領域をマークするモダリティ機能と発話連鎖効力の機能が連動することにより、談話上における機能として「ね」5種類、「よ」3種類、「よね」3種類に分類された。本研究の機能分類により従来区別し切れなかった終助詞「ね」「よ」「よね」の相違点をより明確にするとともに、結合型「よね」の捉え方に新しい示唆を与えることができた。

1. 研究背景

終助詞は日本語の大きな特徴の一つで、その役割は非常に大きい。その中でも「ね」「よ」「よね」は最も使用頻度が高く、聞き手に対して話し手が発話の状況をどのように認識し、聞き手にどのように伝えようとしているのかを表す伝達態度のモダリティ（益岡1991）として、コミュニケーションにおいて重要とされる。

終助詞「ね」「よ」「よね」に関しては、様々なアプローチから数多くの先行研究がある。80年代後半から90年代前半にかけては話し手と聞き手が情報や認識などの観点から対立しているか、一致しているかという観点（大曾1986；陳1987；益岡1991等）、また聞き手や話し手のどちらに情報が帰属するのか、近いのか、という観点（神尾1990；メイナード1993等）からの研究が主流であった。90年代に入ると、これまでの聞き手の知識状態の推測という考え方から離れ、話し手が発話内容をどのような認知状態で聞き手に伝達しているかを知らせる談話指標とするという考え方が出てきた。この研究例として、記憶領域内の発話内容の処理状況を話し手に伝達するという談話管理理論（金水・田窪1998）、話し手が話し手自身の発話情報の受容レベルを聞き手に提示することで対話調整の機能を果たしているという考え方（片桐1995）、さらには話し手が発話内容について排他的な知識管理を行う準備があるかないかを聞き手に提示する談話指標であるとする考え方（加藤2001）などが挙げられる。これらの研究はそれ以前の研究とは違い、対話の中での話し手の意図と終助詞使用との係わりにより焦点が当てられていると言える（西郷2012）。

以上の先行研究の概観を基に、本研究では先行研究で残された課題を次の3点挙げたい。まず、どの先行研究も終助詞「ね」「よ」「よね」の使い分け・区別について明確な記述が十分とは言えない。次に、結合型「よね」に対し明確な説明が与えられていない。最後に、文レベルの文法的側面か、対話における機能の一側面かといった偏りが見られ、文法的機

能と対話の中の機能を統合し、談話上における機能として広く捉える研究視点が足りない。

2. 研究目的

以上の先行研究の課題を基に、本研究では終助詞研究における新たなアプローチを模索するために、母語場面の自然会話をデータに、文末に付く「ね」「よ」「よね」を取り上げ、談話における働きとしての機能分類を行う。従来区別し切れなかった終助詞「ね」「よ」「よね」の機能の相違点をより明確にするための分析方法を確立する。

2.1 データ

本研究で分析する会話データは宇佐美まゆみ監修（2011）の「BTSJによる日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト）より抜粋した音声付きの2者間の初対面会話6例を文字化したトランスクリプトである。性別の組み合わせは統一されておらず、4組は女性同士、1組は男性同士、1組は男女の会話となる。4組の女性同士のうち1組は年代が違うペアで、その他は同年代のペアである。いずれの会話も「です・ます体」をベースにした会話となる¹⁾。本研究で分析対象とするのは命題を含む発話の文末に付く終助詞「ね」「よ」「よね」である²⁾。

2.2 本研究のアプローチ

2.2.1 分析の枠組み I—命題内容の事柄の領域を示すモダリティ機能

終助詞「ね」「よ」「よね」は多様な機能を持つと指摘されているが、その基本的機能はやはり文法的側面における発話・伝達態度のモダリティ機能（益岡1991）である。このモダリティ機能の体系的分類を目指した先行研究は前述の通り、知識の所有・非所有、認識の一致・不一致、情報の帰属等を基準にしたものが見られるが、本研究では高（2011）を参考に命題内容の事柄の領域を基準に分類することを試みる。

高（2011）によると、日本語では話し手が何らかの事情により聞き手の領域にある事柄について言及する場合、メッセージの内容とともに聞き手の領域であることへの配慮を示すことも必要となり、その配慮の示し方の一つとして文末に終助詞「よ」「ね」「よね」などが使用されるとしている。更に、高は日本語における終助詞を考える際には、命題内容の事柄の領域への配慮が重要であると考えられるが、そのためにはまず「領域」の範囲や分類について考える必要があるとし、「領域」の範囲を神尾（1990）の「情報理論」や鈴木（1997）の「聞き手³⁾の私的領域」の概念や分類を参考に「話者（話し手・聞き手）の

¹⁾ 終助詞の使用は「年齢」「性別」「親疎関係」等に影響されるという指摘もあるが、本研究では主に機能分類の研究に焦点を当てるため、これらの要素と終助詞の使用の関係については特に注目しないことを断っておきたい。

²⁾ 本研究では命題を含む発話の文末に付く「ね」「よ」「よね」のみ分析対象とする。つまり、「ね」の間投用法、感動詞用法、あいづちの発話、フィラーの発話「そうですね」などは分析対象外にする。また、「よね」が付く「だよね/そだよね/そうですよね」のあいづち的発話も分析対象外にする。ただし、「よ」が付く「そうなんですよ」はあいづち的発話ではないため分析対象とした。これらの「そう/そうです」に付く終助詞「ね」「よ」「よね」の機能に関しては今後の課題として残しておく。

³⁾ 本研究の聞き手とは、終助詞を用いる話者を話し手とした場合、発話の受け手となる側を聞き手とする。会話分析等で使う「話し手・聞き手」の用語とは異なる意味で用いるので注意する必要がある。本研究では以降の記述において一貫して終助詞を用いる側を話し手とし、その受け手を聞き手と呼ぶ。

行動・所有物、話者と関係のある人、情報など、話者に関わるすべての事柄を含む」と規定している。このような「領域」の捉え方を基に、終助詞に関わる命題内容の事柄が話し手と聞き手、または中立のどちらの領域に属しているかによって、「聞き手領域の事柄」、「話し手領域の事柄」、「中立領域の事柄」⁴⁾に分類することができ、終助詞はこれらの領域ごとに異なる複数の機能を持つとしている。

本研究では高(2011)を参考に命題内容の事柄の領域の範囲を広く捉えたい。中でも後述する発話連鎖における機能—発話連鎖効力を考察していく上で、命題内容の事柄のうちの「情報」がどちらの領域に属するかが、終助詞「ね」「よ」「よね」を考察することにおいてもっとも重要な手がかりとなる。ただし「情報」以外の他の事柄、例えば聞き手の所有物等も終助詞がマークする事柄の対象になりうるため、領域の範囲に入れることを押さえておく。

高(2011)では終助詞「ね」「よ」「よね」がマークする領域の分類において、「ね」と「よね」は話し手領域、聞き手領域、中立領域の3種類の領域をマークし、「よ」は話し手領域、聞き手領域をマークするのみで、中立領域をマークすることはないとされている。これらの命題内容の事柄の領域と聞き手への働きかけの小目的により「ね」「よね」を5種類、「よ」を7種類に機能分類を行っている⁵⁾。高(2011)の機能分類について次の2つの問題点を指摘したい。まず「ね」と「よね」の区別をしていない点である。次は「よ」の小分類における命題内容の事柄の捉え方に明確な基準が欠けており、曖昧な部分が残る点がある。例えば以下の用例について高(2011)では、聞き手が求める情報「この漢字の読み方」を聞き手領域の命題とし、「よ」を「聞き手の求める新情報告知のための〈注意喚起1〉」と分類している。

(漢字の読み方について尋ねられ、教える場面)

A: すみませんが、この漢字の読み方を教えてください。

B: …それは、「かきとめ」ですよ。(高2011:13より抜粋)

まず、高(2011)が分類する「この漢字の読み方」は聞き手領域の事柄であるという判断に疑問が残る。むしろ「この漢字の読み方がかきとめである」ことを知っている話し手領域の事柄(情報)と捉えるべきではないか。更に「聞き手の求める新情報告知のための注意喚起」という記述では、「よ」がマークする命題内容の事柄の性質についてはある程度反映したとしても、聞き手に対する働きかけについては「注意喚起」の機能の細分類に留まり、聞き手がそれらの多様な「注意喚起」を受け、どう反能しているかまでは明らかではない。とはいえ、高(2011)の分析視点は終助詞「ね」「よ」「よね」が命題内容の事柄をどのように捉えるかを聞き手に示すモダリティ機能においてはある程度説明できると言えよう。そこで、本研究では発話レベルのモダリティ機能は高(2011)の領域の概念を参考に、終助詞「ね」「よ」「よね」が命題内容の事柄の領域をマークするモダリティであると捉える。一方で、具体的な機能の分類においては発話レベルの命題に限らず、談

⁴⁾ 「いい天気ですね」の「天気」のような命題は話し手・聞き手のどちらの領域にも属すると捉えられる一方、どちらの領域にも属しないと捉えることもできる。このような命題を中立領域として捉える。

⁵⁾ 紙幅のため高(2011)機能分類の引用は割愛する。詳しくは高(2011:12)参照されたい。

話レベルに拡大し、後述する発話連鎖における機能—発話連鎖効力の視点を加えることで、談話上における機能として分類し直す。

2.2.2 分析の枠組みⅡ—発話連鎖効力

西郷（2012）では終助詞「ね」「よ」「よね」は聞き手に適切な発話での応答を指令する「発話連鎖効力」を持つとし、その発話連鎖効力による後続発話の連鎖を中心に終助詞「ね」「よ」「よね」の機能の記述を行っている。崔（2015a・b）では西郷（2012）が提案する「発話連鎖効力」の概念を参考に、益岡（1991）・大曾（1986・2005）の意味用法を基に分類した発話機能ごとに「ね」と「よ」の発話連鎖の特徴を考察し、連鎖タイプを分類した。崔（2015a・b）による連鎖タイプの分類は、文末が終助詞「ね」「よ」で終わる発話を中心に、その先行発話と後続発話の連鎖の特徴に焦点を当てたものである。その結果「ね」に4種類の連鎖タイプと、「よ」に3種類の連鎖タイプが見られることを明らかにした。

「ね」の連鎖タイプ（崔 2015a）

- I. 相手の後続発話を導く連鎖
- II. （相手の後続発話を気にせず）話し手自身の後続発話を導く連鎖
- III. （相手の先行発話を受けるのみで）相手の後続発話を導かない連鎖
- IV. 相手の先行発話に依存し、更に相手の後続発話を導く連鎖

「よ」の連鎖タイプ（崔 2015b）

- I. 相手の後続発話を導く連鎖
- II. 話し手自身の後続発話を導く連鎖
- III. 相手の後続発話を導き、更に話し手自身の後続発話を導く連鎖

本研究では引き続き西郷（2012）を参考に、終助詞「ね」「よ」「よね」は発話連鎖における機能—発話連鎖効力があると捉える。なお、崔（2015a・b）でも指摘した通り、発話連鎖効力を捉える際に後続発話のみならず、先行発話に対する効力も分析の焦点とする。崔（2015a・b）の「ね」と「よ」連鎖タイプに通じる共通点等に踏まえ、更に「よね」の連鎖タイプの考察を加えた結果、本研究では終助詞「ね」「よ」「よね」の発話連鎖効力として3通りあることが分かった。以下それぞれの発話連鎖効力の特徴とともに示す。

発話連鎖効力Ⅰ：聞き手の後続発話を導く

特徴：終助詞「ね」「よ」「よね」による発話連鎖効力が直後の聞き手の後続発話にかかる。

発話連鎖効力Ⅱ：話し手自身の現在の連鎖を管理する

特徴：終助詞「ね」「よ」「よね」による発話連鎖効力が直後の話し手自身の発話にかかり、話し手が発話権を管理する。

発話連鎖効力Ⅲ：先行連鎖に区切りを付ける

特徴：終助詞「ね」「よ」「よね」による発話連鎖効力が直前の（聞き手／話し手）発話、または一連の先行連鎖（やり取り）にかかり、先行連鎖を終了させる。

以上の分析視点を持ち、本研究では次の仮説を基に議論を進めていく。

仮説：終助詞の機能は話し手が会話の中（発話の連鎖）で、発話における命題内容の事柄の領域をどのように捉えるかを伝達するモダリティ機能を果たすとともに、そのモダリティ機能は後続する発話に対し、発話連鎖効力を果たす。つまり、談話上における終助詞の機能はモダリティ機能と発話連鎖効力が連動する形で現れる。

3. 分析と考察

ではなぜ命題内容の事柄が同じ領域なのに、話し手は「ね」「よ」「よね」を使い分けているのだろうか。この間に答えるために、本研究ではまず命題内容の事柄の領域による機能分類を分析の切口とし、同じ領域の「ね」「よ」「よね」がそれぞれ発話連鎖効力においてどのような違いがあるかを分析した。

分析の結果、「ね」は5種類、「よ」は3種類、「よね」も3種類の機能に分類することができた。まず、命題内容の事柄が聞き手領域の場合、発話連鎖効力Ⅰの「ね」が2種類「ね①」⁶⁾と「ね②」の、「よ①」、発話連鎖効力Ⅱのものではなく、発話連鎖効力Ⅲの「よね①」があった。次に、命題内容の事柄が話し手領域の場合、発話連鎖効力Ⅰの「ね③」と「よね②」、発話連鎖効力Ⅱの「よ②」、発話連鎖効力Ⅲの「よ③」があった。最後に、命題内容の事柄が中立領域の場合、発話連鎖効力Ⅰの「ね④」、発話連鎖効力Ⅱの「よね③」、発話連鎖効力Ⅲの「ね⑤」があった。表でまとめると表1の通りである。

表1 命題内容の事柄の領域ごとにみた発話連鎖効力の結果

領域	発話連鎖効力Ⅰ 聞き手の後続発話を導く	発話連鎖効力Ⅱ 話し手自身の現在の連鎖を管理する	発話連鎖効力Ⅲ 先行連鎖に区切りを付ける
聞き手	ね①、ね②、よ①		よね①
話し手	ね③、よね②	よ②	よ③
中立	ね④	よね③	ね⑤

次節から事例を通し、上記のそれぞれの「ね」「よ」「よね」の命題内容の事柄の領域をマークするモダリティ機能と、発話連鎖効力について説明し、それらの談話上における終助詞の機能として提示する。分析に用いる事例のトランスクリプトの右側に分析の列を設け、分析対象とする終助詞の種類を示す。終助詞を含む発話は網掛けし、終助詞は太字にして下線を引いた。なお、トランスクリプトの中の文字化記号は本文の中で省略する場合がある。

⁶⁾ 分類された終助詞は番号を通して示す。なお、この通し番号は崔（2015a・b）で用いた通し番号とは一致しないので注意されたい。

3.1 命題内容の事柄が聞き手領域の場合

3.1.1 ね①の機能

事例1：JBF01がJSF02に船で韓国に行くことについて聞き、JSF02が答える場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	分析
236	220	*	JBF01	船どれくらいかかるんですか？。	
237	221	*	JSF02	船はね、船はねすぐ着くんですけど、(うん) なんか停泊してるみたいで。	
238	222	*	JBF01	あー。	
239	223	*	JSF02	こっち夕方にて、で、行って停泊して、(あー) 朝8時くらいに(あー) 出れるって形で。	
240	224	*	JBF01	船の中泊まるんです <u>ね</u> 、じゃあ、そういうと。	ね①
241	225	*	JSF02	なんかそれもすごかったですよ、なんか。	
242	226	*	JSF02	船の、なんか船員の人が(うん)、なんか今夜一緒に飲もうみたいになって。	
243	227	*	JBF01	〈船員が？〉{ } 〈笑い〉。	
244	228	*	JSF02	〈私たち〉{ } が5人で行ったんですけど、女の子5人で行って…(省略)	

事例1はJBF01がJSF02に対し、船で韓国に行くことについて聞き、JSF02が答える場面である。240行目のJBF01の発話「船の中泊まるんですね、じゃあ、そういうと」の「ね」がね①に当たる。まず、当発話⁷⁾の命題「船の中に泊まる」主体は、聞き手JSF02であるため聞き手領域に属する事柄である。また、当発話は直前の239行目のJSF02の「夕方にて、で、行って停泊して、(あー) 朝8時くらいに(あー) 出れるって形で」を受け、その内容について確認を行う発話である。直後の241行目からそれ以降のJSF02の発話は、直接に240行目のJBF01の確認に対する応答の内容ではないように見えるが、その一連の情報提供は「船の中で泊まって行くこと」を説明しているの、確認に対する応答をしている発話であると考えられる。

以上のようにね①は話し手が発話する命題内容の事柄が聞き手領域に属する事柄であることをマークし、そのマークした情報の真相を聞き手に確認するための「確認要求」の機能を持っている。同時にそれに連動する発話連鎖効力の機能として聞き手による応答を求めており、その一連の応答として一連の情報提供の発話が用いられると考えられる。本研究ではこのような発話連鎖効力の機能を含んだね①の談話上における機能を「情報の確認要求のね①⁸⁾」と定義する。

ここで特に指摘しておきたい点として情報の確認要求のね①に用いた「要求」という用語が含意する意味で、聞き手の後続発話を導く発話連鎖効力Iを「要求」という機能の定

⁷⁾ 分析対象となる終助詞を含む発話を「当発話」と呼んで他と区別する。

⁸⁾ 機能分類を分かりやすく表記するため、通し番号をそのまま付けて示す。

義に盛り込んだ点である。このようにモダリティ機能と発話連鎖効力の両方を組み込む形で、広く談話上における機能として提示するアプローチは従来の先行研究の発話レベルにおける分析にはなかった視点で、本研究の新たな試みである。

3.1.2 ね②の機能

事例2：JF01が仕事について語った後、JM01が話題を始める場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	分析
277	250-a	/	JM01	そうですね&,	
278	250-b	*	JM01	&そうですね。	
279	249-2	*	JF01	自身ができない(うん)、まあ、しないでいしょうけど。	
280	251	*	JM01	まあ、そうなんでしょうけど [声が小さい]。	
281	252	*	JF01	そうなん(あー)ですよ。	
282	253	*	JF01	あ、そうなんですか。	
283	254	*	JM01	うん《少し間》、へえ、デザインか。	
284	255	*	JF01	はい。	
285	256	*	JM01	器用なんです <u>ね</u> 。	ね②
286	257	*	JM01	=僕なんて、美術の成績がいつも悪かったから。	
287	258	*	JF01	あ、そうですか〈笑いながら〉。	
288	259	*	JM01	できる人は羨ましい〈笑いながら〉。	
289	260	*	JF01	ははは〈笑いながら〉、あー、まあ、ちっちゃいごろからやっぱり(うん)、好きで書いていて、周りの人が…(略)	

事例2はJF01が自分の仕事について語り、その話が終わった後、一瞬の間があった時にJM01が新しい話題を始める場面である。285行目のJM01の発話の「ね」がね②に当たる。まず、当発話の命題である「器用である」は聞き手JF01に対するコメント、または評価であるため、当然聞き手領域の事柄である。当発話の直前のやり取りでは、JF01は自分がやっているデザインの仕事について説明していた。その話題がいったん終わり、間が生じた時にJM01はJF01に対し「器用なんですね」とコメントする形で新たな話題展開を促している。更に286・288行目のJM01の発話は「僕なんて、美術の成績がいつも悪かったから」「できる人は羨ましい〈笑いながら〉」と自分自身に関して語る発話となっている。このJM01の発話からね②は聞き手領域の事柄をマークするモダリティではあるが、前節の情報の確認要求のね①とは異なり、聞き手の応答を求めるわけではないことが明らかである。むしろ、ね②でマークする聞き手領域に対するコメントに引き続き、自分自身の情報提供も付け加えることで、よりスムーズにそのコメントを聞き手に受け入れてもらえるように発話の連鎖が組み立てられているように見える。そしてJF01は287行目で「あ、そうですか〈笑いながら〉」とJM01の発話を受け、289行目で「ははは〈笑いながら〉、あー、まあ、ちっちゃ

いごろからやっぱり（うん）、好きで書いていて、周りの人が…（略）」と、「器用である」コメント・評価を受け入れ、その話題に関する発話を展開している。

以上のようにね②は、情報の確認要求のね①と同様に聞き手領域をマークするモダリティ機能を持つ。発話連鎖効力においては聞き手の後続発話を導くが、導く内容は話し手が行うコメント・評価を聞き手が受け入れるように、即ち「コメントの受け入れ」に当たる後続発話を導く。情報の確認要求のね①の場合は応答となる後続発話を導くことで隣接ペアを構成する強い発話連鎖効力 I を持つが、ね②の発話連鎖効力 I はそれほど強くない。したがって、ね②の談話上における機能は「コメントの受け入れ要求のね②」と定義する。また「受け入れ要求」という用語を用いた点からも、当然「要求」という用語を用いた情報の確認要求のね①より、発話連鎖効力の度合いが弱いことを示していると言える。

3.1.3 よ①の機能

よ①の事例は本研究のデータからは見られなかったため、先行研究で挙げられる用例を用いて説明を進めたい。

（相手に注意を呼び掛ける場面）

用例 1（高 2011：13 より）

A：あのう……。 B：はい。

A：かばんが開いていますよ。 B：えっ。あ、どうもすみません。

用例 2（大曾 2005：6 より）

SE2：髪の毛についているよ。 WA1：〈笑い〉ありがとう。

SE2：衣みたいなのが。 WA1：衣が。

SE2：うん。

上の用例の「よ」の命題内容の事柄はそれぞれ「かばん」と聞き手の「髪の毛についているもの」で聞き手領域の事柄である。聞き手領域の事柄で聞き手が気づいていないことを「よ」でマークすることで聞き手に対し「知らせる・気づかせる」、即ち「指摘」を行っている。聞き手の後続発話をみると「えっ。あ、どうもすみません」「〈笑い〉ありがとう」となり、直前まで気づいていなかったことを話し手の指摘を受け、今気づいた・認識したことを示す発話である。このようによ①は聞き手に対し指摘を行うとともに、その指摘に対する聞き手の認識変化も要求していると言えよう。「要求」という発話機能からよ①は発話連鎖効力 I の聞き手の後続発話を導く機能があると捉えることができるか、その時の後続発話は必ずしも実質的な発話でなくてもよく、開けっ放しのかばんをしめる行動、または髪の毛の衣を取る行動でも良い。いずれにしろ、よ①は話し手が聞き手領域に属する事柄について指摘することにより、聞き手の認識の変化を要求する発話に用いられると捉えたい。したがってよ①の談話上における機能を「(指摘による) 行動要求のよ①」と定義する⁹⁾。

⁹⁾ 認識変化の要求を含め、より広く捉えるために「行動要求」の用語を用いる。本研究のデータは全て初対面会話だったため、場面性の特徴から指摘の発話が見られないことからよ①も見られなかったと予想される。

3.1.4 よね①の機能

事例3：J1の名前の漢字について確認する場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	分析
10	10	*	J2	え、「J1の名前」っていうのは、真実の「真」に(み…)、「美しい」ですか？。	
11	11	*	J1	はい、真実じゃないほうです、み、「み」が。	
12	12	*	J2	あ、はいはいはいはい、あ、そうそう、真実の人もいますもんね。	
13	13	*	J1	うん、そうなんです。	
14	14	*	J2	うん。	
15	15	*	J1	よく間違っ、手紙とか来ますよ 〈笑い〉。	よ③ ¹⁰⁾
16	16	*	J2	あー、なるほど。	
17	17	*	J1	うん。	
18	18	*	J2	でも「J1の苗字」はその点、多分間違えようがな、(ないですよね) {}。	よね①
19	19	*	J1	〈あ、ない〉 {} ですね 〈笑いながら〉。	
20	20-1	/	J2	私も「J2の氏名」ってのは、あんまり、「くに」っていうのは、あの、なんだ、昔のソビエト連邦の「邦」の字だから、	
21	21	*	J1	ああ、はいはいはい。	

事例3は、J1の名前の漢字について確認する場面である。18行目のJ2の発話の「よね」がよね①に当たる。10行目でJ2は「え、J1の名前っていうのは、真実の「真」に(み…)、「美しい」ですか」と聞き、11行目でJ1が「真実じゃないほうです、み、みが」と答えている。その後17行目まで名前の漢字に纏わる発話が続き、18行目のJ2の発話「でもJ1の苗字はその点、多分間違えようがな、ないですよね」と今までのJ1の名前に関するやり取りを基に、自分の考えを示すため文末によね①を含んだ発話を用いている。当発話の命題「J1の名前」は聞き手のJ1に属する聞き手領域の事柄であるため、よね①は聞き手領域をマークするモダリティ機能を持つ。19行目でJ1の「あ、ないですね 〈笑いながら〉」と同意を示す発話が後続する。このような発話連鎖からよね①の発話連鎖効力は、聞き手の後続発話を導く発話連鎖効力Ⅰであるように思われる。しかし、ここでは取ってそれを避け、発話連鎖効力Ⅲの先行連鎖に区切りを付ける機能として捉えたい。その理由は次の通りである。まず、よね①がマークする聞き手領域の事柄は、先行発話における一連のやり取りの中で言及され、話し手が既に把握した聞き手領域の事柄である。そのため、よね①は聞き手に対して聞き手領域の事柄を確認するために用いられるとは言い難い。また、ここが情

¹⁰⁾ 後述する3.2.4よ③の機能の記述にも事例3を用いる。

報の確認要求のね①と区別される点である¹¹⁾。次に、よね①が付く発話は先行する一連の発話連鎖（J1の名前の漢字に関するやり取り）をまとめるように組み立てられ、J2はその直後の20行目で「私も「J2の氏名」ってのは、あんまり、「くに」っていうのは、あの、なんだ、昔のソビエト連邦の「邦」の字だから」と、談話の方向性を変え、自分の名前を話題にしている。ここで注目すべき点は、よね①がマークする聞き手領域の事柄は「今その発話連鎖の位置」において話し手が既に把握でき、共有可能な聞き手領域の事柄である点と、よね①が向けられる発話連鎖効力の方向性は先行連鎖にある点の2つである。

以上からよね①は聞き手領域をマークするモダリティ機能を持ち、発話連鎖効力Ⅲの先行連鎖に区切りを付ける機能持つとする。このようなよね①の談話上における機能は、「共有の表明のよね①」と定義する。「共有」という用語が示すのは「既に把握し、共有した聞き手領域の事柄」で、「表明」という用語が示すのは先行発話をまとめるように発話を組み立てる発話連鎖効力Ⅲにある。

3.2 命題内容の事柄が話し手領域の場合

3.2.1 ね③の機能

事例4：J2がJ1にスペイン語のタイピング方法について聞く場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	分析
346	306-2	*	J1	すっごく、いびつなクエスチョンマークになるんだけど [笑いながら] (〈笑い〉)、だんだんやっているうちに (うん)、なんか、うまくなっていった (笑いながら)。	
347	308	*	J2	へえー、でもあれ、パソコンで出せるんですか、ちゃんと？。	
348	309	*	J1	出せますね。	ね③
349	310	*	J2	おお。	
350	311-1	/	J1	そう、なんか、一応、言語、いじるところがあって、	
351	312	*	J2	うんうんうん。	

事例4はJ2がJ1にスペイン語のタイピング方法について聞く場面である。348行目のJ1の発話の「ね」がね③に当たる。347行目でJ2は「(スペイン語のクエスチョンマークを)パソコンで出せるんですか」と質問している。その質問に答え、348行目でJ1は「出せますね」とね③を用いている。質問に対する応答となる当発話の命題「(スペイン語のクエスチョンマークを)出せる」は話し手領域の情報である。したがって、ね③は話し手領域をマークするモダリティ機能を持つ。350行目でJ2の「おお」と理解を示すあいづちがみられ、350行目でJ1は「そう」と反応してから、「なんか、一応、言語、いじるところがあって」と、直前の「(スペイン語のクエスチョンマークを)出せる」情報を更に具体的に説

¹¹⁾ 「ね」と「よね」は確認の機能において従来区別がはっきりしなかった。

明している。つまり、事例4でJ2はJ1の質問を受け、応答をする発話にね③を用い、いったんその応答を聞き手に対し受け入れることを求める。その後、聞き手の受け入れを確認してから、更に直前のね③でマークする情報を詳細化していく展開を取っている。

例4では話し手がね③を用いることで聞き手に対し、受け入れ要求を行っていることが見られた。しかし、ね③はいつも聞き手のはっきりした受け入れが後続するとは限らない。以下の事例5はね③の後に聞き手の受け入れの後続発話が見られない事例である。

事例5：J2の専門の歴史哲学について話す場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	分析
62	57	*	J3	え、どんな、歴史哲学ってどんな感じですか？。	
63	58	*	J4	そーですね、えーとー歴史哲学っていうのはー(…中略)	
64	59	*	J3	なんか、そう、なんか、全然私が思ってた哲学と全然違う [↑] (うん) って気がする。	
65	60	*	J4	そう、ね、歴史学の方法論 (うん)、かな、うん。	
66	61	*	J4	哲学、純粋な哲学っていう訳じゃないんだけど (ん)、うん。	
67	62	*	J4	だけどー、そいでー今一生懸命歴史哲学系の本読んでるんですけどー。	
68	63	*	J4	(…途中中略)	
69	64	*	J3	なんか、知ってる哲学の、人で知ってるー人、あの一知り合いの (うん)、哲学学んでる人は (うん)、全然なんか、なんだろー、なんか、去年あの一教育の授業を一つ取っていて (うん)、で、その一班を作ってグループワークだったんですね。	ね③
70	65	*	J3	でー、そしたら教育っても全然皆教育系の人ではなくて、色んな人がその班にいて、あの一、英語の一、なんだろー、英語の専攻の人とかー (うんうん)、あと一、歴史の専攻の人とか、哲学の専攻の人とか色んな人がいてー、で、なんか、環境教育の班だったんですね。	ね③
71	66	*	J3	たら、哲学の人はー環境哲学、あ、環境哲学について考えてきてー、とか色々持ち寄ってやったんですけどー。	
72	67	*	J3	うん、なんか、うん、環境哲学って言っても、うん、なぜ、なぜゴミは捨てちゃいけないかー、みたいな、そういう感じの哲学だったんですね。	ね③
73	68-1	/	J3	だから、なんていうんだろう、	
74	69	*	J4	あ、そうなんだー。	
75	68-2	/	J3	全然だから、うん (へー)、違うなー、〈哲学っていても〉 { }、	

事例5はJ2の専門の歴史哲学について話す場面である。69・70・72行目の「ね」は全てね③に当たる。62行目でJ3は「え、どんな、歴史哲学ってどんな感じですか」と質問し、63・65・66・67・68行目でJ4は歴史哲学について説明をしている。その説明を受けたJ3は69・70・71・72・73・75行目の一連の発話の中で、自分の知り合いの人で歴史哲学をやっている人の話をし、今まで自分が歴史哲学に対して持っていた理解を述べている。69行目の「その一班を作ってグループワークだったんですね」、70行目「なんか、環境教育の班だったんですね」、72行目「そういう感じの哲学だったんですね」の命題はいずれも話し手J3が歴史哲学に対して持っていた認識であるため、話し手領域の事柄である。ここのJ3の一連の情報提供の発話を見ると次のような特徴がある。まず、ね③で終わる発話の直後には談話標識である70行目の「で一、そしたら」、71行目の「たら」、73行目の「だから」が見られる。談話標識によって発話権が維持され、一連の情報提供は一貫してJ3が歴史哲学に対して持つ認識という1つのことに関する情報でつながっており、情報を徐々に具体化していく展開を成す。次に、J3の69・70行目の「なんだろう」、72行目の「みたいな」、73行目の「だから、なんていうんだろう」の発話から、J2は歴史哲学について詳しく理解しているようには見えず、今その場で考えつつ、思い出しつつ、整理しつつ情報を提示することが見て取れる。ところが、事例5ではね③によって導かれる聞き手の受け入れの発話のはっきり見られない。その理由として考えられるのは、話し手が情報提供を続けるために、素早く付け出す談話標識により、聞き手に対する「受け入れ要求」の発話連鎖効力が弱まり、無効になった可能性がある。この点から考えると崔（2015a）で指摘した通り、ね③¹²⁾は聞き手に対し一方的に「受け入れ要求」を行っているとも言えよう。

以上からね③は命題内容の事柄が話し手領域であることをマークするモダリティ機能を持ち、発話連鎖効力Iの聞き手に対し受け入れの後続発話を導く機能があると捉える。ね③の談話上における機能は「情報・意思の受け入れ要求のね③」と定義する。

3.2.2 よね②の機能

事例6：JM01が所属大学の敷地について説明し、JF01が質問をする場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	分析
221	207	*	JM01	跡地をそのまま（あー）、校舎にしたって形だったらしいですけどね。	
222	208	*	JF01	あー、そうなんですか。	
223	209	*	JF01	そんな小さい敷地内に、学生がみんな入りきったんですか？。	
224	210	*	JM01	入りきったんですよー [声が小さくなる]。	よね②
225	211	*	JF01	へー。	
226	212	*	JM01	ここ大学の規模そんな大き〈くないんで〉{ }。	

¹²⁾ 崔（2015a）のね②が、本研究のね③に当たる。

事例6はJM01が自分が所属する大学の敷地について説明し、一通り説明が終わって、JF01が質問をする場面である。224行目のJM01の発話の「よね」がよね②に当たる。223行でJF01は「そんな小さい敷地内に、学生がみんな入りきったんですか」と質問をしている。224行目でJM01はそれに答え「入りきったんですよ」と応答する発話によね②を用いている。当発話の命題「(学生がみんな) 入りきる」という情報は話し手が持つ情報であるため、「よね」は話し手領域の情報をマークするモダリティ機能を持つ。直後の225行目でJF01の「へえ」のあいづち的発話が見られ、その後の226行でJM01は「ここ大学の規模そんな大きくないんで」と、大学の敷地に関する説明を引き続き展開している。この226行目のJM01の発話は、直前の自分の224行目「入りきる」ことに対し、説明を与えている。このようによね②がマークする話し手領域の事柄は、しばしば既に話し手が先行発話において言及し、聞き手が安易に理解できる情報であるか、または224行目のJM01のように、よね②でマークした事柄に対し、説明を与える発話を付け出す後続発話を持つ連鎖である。つまり、よね②がマークする話し手領域の事柄は先行連鎖によってサポートされるか¹³⁾、話し手自身の後続発話の連鎖によってサポートされるかのどちらで、どちらも聞き手に安易に受け入れられ、共有可能な事柄として発話連鎖上で現れる。言い換えれば、このような発話連鎖の特徴にも聞き手に対し「受け入れ要求」を示す性質があると言える。

以上からよね②は話し手領域をマークするモダリティ機能を持ち、聞き手の受け入れの後続発話を導く発話連鎖効力Iを有すると捉える。こうしたよね②の談話上における機能を「共有の受け入れ要求のよね②」と定義する。

3.2.3 よ②の機能

事例7：J2が自分の学科について説明する場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	分析
61	58	*	J1	〈じゃあ〉 {} むしろなんか(うん)、英語学科みたいなこととかも多いんですか？。	
62	59	*	J2	そうそうそうそう。	
63	60	*	J1	へー。	
64	61	*	J2	なんか英文学科と授業の内容たまに(うん)、内容的にたまにかぶってたりするみたいですね。	
65	62	*	J1	ほお。	
66	63	*	J2	なんか、あの一、「地名」にも(うん)、言語学科ってのがあるんですよ(うん)。	よ③
67	64	*	J2	でもそこいくと一、こう、英語とかメジャー言語ができなくて、あの、なんだ、こう、どっかのフィールドワークとか行ったりするんですよ。	よ③

¹³⁾ 連鎖の特徴は前述した共有の表明のよね①の連鎖の特徴に通じる部分もあるが、両者はマークする命題内容の事柄の領域がそれぞれ話し手領域と聞き手領域で異なる。

68	65	*	J1	ほう。	
69	66	*	J2	こうなんか、アフリカの奥地とか行って…〈笑い〉。	
70	67	*	J1	え、フィールドワークですか、それ〈笑いながら〉？。	
71	68-1	/	J2	〈笑い〉なんかこう…,,	
72	69	*	J1	すごそう。	
73	68-2	*	J2	〈笑い〉なんか、なんか今までは、知られてないような言語の（うん）研究とかをやったり（へー）するようなのが、「地名」の言語学で、で、日本語についてやりたいときは、XX[地名]の国語学（うん）っていうのに行くと、できるらしいんですよ。	よ③
74	70	*	J1	ふーん。	
75	71	*	J2	うん。	
76	72	*	J1	で、ここでやるのは、だから、もっと、なんですかね…（省略）	

事例7はJ2が自分の学科について説明する場面である。66・67・73行目のJ2の発話の「よ」はいずれもよ②に当たる。61行目でJ1は「英語学科みたいなこととかも多いんですか」と質問している。その答えとして62行目からJ2の一連の発話の連鎖が続く。よ②を用いた66・67・73行目の情報提供の発話を見るとその命題は66行目「言語学科というのがある」、67行目「フィールドワークとか行ったりする」、73行目「日本語についてやりたいときはXX[地名]の国語学っていうのに行くとできるらしい」となっており、いずれも話し手が所有する情報で、よ②は話し手領域をマークするモダリティ機能を持つと言える。

3・2・1において情報・意思の受け入れ要求のね③を述べる際に、ね③がマークする情報の特徴について、一連の情報提供が一貫してJ3が歴史哲学に対して持つ認識という情報につながっている特徴を指摘した。それに比べると、よ②がマークする話し手領域の情報は個々の発話ごとに情報提供の完結性が際立つように見える。66・67・73行目のJ2の一連の発話はいずれも自分の学科についての説明ではあるが、66行目「言語学科ってのがあるんですよ」、67行目「フィールドワークとか行ったりするんですよ」、73行目「日本語についてやりたいときはXX[地名]の国語学っていうのに行くとできるらしいんですよ」と、それぞれの情報提供の発話をよ②で区切って、個々の発話における情報提供を当発話内で完結する形で、次々と順追って提示していく。なお、途中J1の相づち68・70・72行目にJ2の情報提供を受けて反応する発話が見られるが、J2はそれに対してさほど反応することなく、発話権維持を続ける。したがって、よ②は情報・意思の受け入れ要求のね③のように、聞き手に対し「受け入れを要求する形」で情報提供をするのではなく、「受け入れさせる形」で情報提供をすると捉えるべきである。

以上のことからよ②は命題内容の事柄が話し手領域であることをマークするモダリティ機能を持ち、発話連鎖効力Ⅱの話し手自身の現在の連鎖を管理する機能を持つとする。このようなよ②の談話上における機能を「情報提示のよ②」と定義する。

3.2.4 よ③の機能

よ③の機能の分析は3.1.4の事例3を参照されたい。事例3はJ1の名前の漢字について確認する場面である。15行目のJ1の発話の「よ」がよ③に当たる。10行目でJ2はJ1の名前の漢字について「真実の真に（み…）美しいですか」と聞き、11行目でJ1は「真実じゃないほうです、み、みが」と答えている。J1の名前の漢字に関する確認が終わり、15行目でJ1は「よく間違っ手紙とか来ますよ」と自分の名前につわる事柄を伝える発話によ③を用いている。よ③は「間違っ手紙とか来る」という話し手領域の事柄をマークするモダリティ機能を持つ。その後16行目でJ2の「あーなるほど」という受け入れの発話が見られるが、17行目でJ1は「うん」の相づちを打つのみで、「よく間違っ手紙とか来る」という話題をそれ以上展開しない。つまり、J1の「よく間違っ手紙とか来ますよ」の発話は、先行する自分の名前の漢字に関する一連のやり取りをまとめる方向に持っていくための情報提供の発話であって、更に展開しようとする気はしない。

このような特徴を持つ「よ」は普段の会話でもよく見つけることができる。

（聞き手に呼ばれ、返事をする場面）

A：今忙しい？ちょっと台所へ来てくれない？

B：この手紙を書いってしまったらすぐ行くよ。（高2011：13より抜粋¹⁴⁾）

上記の用例の「よ」もよ③と捉えることができる。命題「すぐ行く」は「よ」によってマークされる話し手領域の行為である。発話連鎖の特徴をみると「よ」は先行発話に向け、先行発話に応えるとともに、先行連鎖を終了（区切りを付ける）させている。つまり、よ③がマークする話し手領域の情報は、それ以上展開する必要のない情報の特徴を持つ。同じ話し手領域をマークする「よ」を、よ②とよ③に分類した理由はここにある。即ち、よ②は話し手自身の後続発話を導き管理する発話連鎖効力Ⅱを持つが、よ③は先行連鎖のほうにかかり区切りをつける発話連鎖効力Ⅲを持つ。したがって、よ③の談話上における機能は「意思表明のよ③」と定義することができる。

3.3 命題内容の事柄が中立領域の場合

3.3.1 ね④の機能

事例8：他の外国語を勉強すると英語を忘れてしまうと話す場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	分析
316	280-2	*	J1	〈フランス語〉{} とったから。	
317	282	*	J2	うん。	
318	283	*	J1	もう全然英語ができなくなっちゃって。	
319	284	*	J2	ははは 〈笑い〉。	

¹⁴⁾ この用例の「よ」について、高(2011)では話し手領域をマークする「よ」として、命題内容の事柄は話し手の行為(「台所に行く」)、機能としては聞き手に直接関わる新情報告知のための〈注意喚起6〉としている。

320	285	*	J1	今困ってる〈笑い〉。	
321	286	*	J2	でも、確かに、英語はやらないと忘れます <u>ね</u> ？。	ね④
322	287	*	J1	うん。	
323	288	*	J2	うん。	
324	289	*	J1	全然分かんない、もう（うん）。	
325	290	*	J2	もう、単語量なんて、受験の時の半分以下かな。	

事例 8 は J1 が英語以外の他の外国語を勉強し始めると、英語を忘れてしまうことについて語り、J2 が同意を示す場面である。321 行目の J2 の発話の「ね」がね④に当たる。316・318・320 行目で J1 は「フランス語とったから、もう全然英語ができなくなっちゃって、今困ってる〈笑い〉」と話し、それを受け 321 行目で J2 は「でも、確かに、英語はやらないと忘れますね」と同意を示す発話にね④を用いている。J2 の当発話の命題「英語はやらないと忘れる」という事柄は J2 と J1 の両方が共有する中立領域の事柄で、ね④は中立領域をマークするモダリティ機能を持つ。J2 の同意を示す発話を受け、J1 は 322 行目で「うん」、324 行目で「全然分かんない、もう」と J2 に対し、同じく同意を示す発話を発している。つまり、話し手はね④を用い、聞き手に対し同意を示すと同時に、聞き手も自分に同意を示してくれることを要求する発話連鎖効力を課している。

以上のようにね④は命題内容の事柄が中立領域をマークするモダリティ機能を持ち、発話連鎖効力 I の聞き手の後続発話を導く機能を持つ。したがって、ね④の談話上における機能を「同意・共感要求のね④」と定義する。3.1.1 で情報の確認要求のね①が聞き手の応答を導く発話連鎖効力が強いことを指摘したが、同意・共感要求のね④も聞き手の同意を引き出す発話連鎖効力が強い。

3.3.2 よね③の機能

事例 9：J1 と J2 が互いに自分が習っている外国語科目について話し合う場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	分析
299	268-1	/	J1	ていうか、英語だと、ほら、活用がない、じゃないですか [↓]？。	
300	269	*	J2	はいはいはい。	
301	268-2	*	J1	三人称単数ぐらいしか。	
302	270	*	J2	うん、あそう、ラテン系は難しいんです <u>よね</u> 。	よね③
303	271	*	J1	そう。	
304	272	*	J2	私もフランス語だけど（あ）、フランス語、活用けっこう大変だから。	
305	273	*	J1	あ、私も、二外、フランス語。	

事例 9 は J1 と J2 が互いに自分が習っている外国語科目について話し合う場面である。

302行目のJ2の発話の「よね」がよね③に当たる。299・301行目でJ1は「英語だと、ほら、活用がない、じゃないですか」「三人称単数ぐらいしか」と、英語は（スペイン語に比べると）習得しやすいことを述べている。その発話を受け302行目でJ2は「うん、あそう、ラテン系は難しいんですよ」と「ラテン系（の言語）」という新しい内容の発話によね③を用い、同意を示している。会話の中でJ1とJ2が大学で習っている外国語はそれぞれスペイン語とフランス語であることが語られ、両方ラテン系の言語である。したがって「ラテン系（の言語）」という命題は両者のどちらにも属する中立領域の事柄で、よね③は中立領域をマークするモダリティ機能を持つ。

ここで前の事例8の同意・共感要求のね④が用いられた「でも、確かに英語はやらないと忘れますね」の発話を振り返ってみよう。ね④がマークする命題内容は直前の聞き手の命題内容を引き継いだ中立領域の事柄であった。しかし、よね③がマークする「ラテン系（の言語）」は話し手が新たに持ち出した新しい命題内容である。この点を押さえたうえ、その後の後続発話の連鎖をみると、J2は304行目で「私もフランス語だけど（あ）、フランス語、活用けっこう大変だから」と述べており、この発話は正に302行目「うん、あそう、ラテン系は難しいんですよ」を引き続き展開する連鎖となっている。よね③は、話し手が新しい命題内容の事柄を聞き手と当然共有できる—中立領域のものとして捉えて提示するとともに、その事柄を直接共有の話題として展開する発話連鎖の特徴を持つことが分かる。

以上からよね③は中立領域をマークするモダリティ機能を持ち、発話連鎖効力Ⅱの話し手自身の現在の連鎖を管理する機能を持つと促える。談話上における機能は「共有の提示のよね③」と定義する。「よね」が付く発話内容の特徴を指摘した先行研究はいくつかあり、うち大曾（2005）では「よね」は話し手と聞き手が共有する共通経験、多くの人によって共有される一般常識等の発話内容に付くと指摘されている。これは本研究によるよね③の考察とも通じる。共通経験、一般常識等中立領域の事柄を持ち出す際によね③が用いられ、これらの事柄は話し手により新しい発話内容として提示されたとしても、そのまま直接共有の話題として発話連鎖を展開することを容易に可能なものになっている。

3.3.3 ね⑤の機能

事例10：J2が在籍する大学に合格した人なら、他大学には行くわけがないと話す場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	分析
235	213	*	J1	ここがじゃあ第一志望？。	
236	214	*	J2	そう、ですね。	
237	215	*	J1	でも普通そうですよねえ（笑い）。	
238	216	*	J2	〈笑い〉多分「J2の在籍大学名」受かって、ける人ってあまり〈いないしょー〉{ }。	
239	217	*	J1	〈あまり〉{ } いないね（笑い）。	ね⑤

240	218	*	J2	でも、一応なんか、うん、補欠っていう枠は一応あるらしいですけど（ふーん）、公表はしないですけど、もちろん。
-----	-----	---	----	---

事例10はJ2が在籍する大学に合格した人なら、他大学には行くわけがないと、二人で話し合う場面である。239行目のJ1の発話の「ね」がね⑤に当たる。238行でJ2は「多分J2の在籍大学名受かって、ける人ってあまりいないしょ」と、自分が在籍する大学に進学できた人に対する自分の考えを述べるが、この発話は同時にJ2に対し同意を求める発話でもある。それを受け、239行でJ1は「あまりいないね〈笑い〉」と同意を示し、ね⑤を用いている。当発話の命題「(ける人が) あまりいない」は直前のJ2の発話内容の一部を繰り返す形式を取っており、聞き手と共有する中立領域の事柄と捉えることができる。ね⑤は中立領域の事柄をマークするモダリティ機能を持つ。実際ね⑤がマークする命題は事例10の「いないしょ」に対し、「いないね」と受けるように、先行する聞き手の発話の繰り返しや言い換え等の形式を取り、先行発話の発話内容—事柄を引き継ぐことが多い。そしてその後の239行でJ2は「でも、一応なんか、うん、補欠っていう枠は一応あるらしいですけど（略）」と直前の自分の談話進行を継続している。つまり、ね⑤はもっぱら聞き手の先行発話に向け、同意を示すことに留まり、聞き手の後続発話を導くこともなければ、話し手自身の後続発話も展開しない。

以上からね⑤は命題内容の事柄が中立領域であることをマークするモダリティ機能を持つとする。発話連鎖効力に関しては聞き手の先行発話を受けて反応し、その方向性が先行発話にかかっていると捉える。もし聞き手の後続発話を導くとしたら、それは同意・共感要求のね④として分類すべきものであって、一方で、もし話し手が自分自身の後続発話を展開したいのであれば、話し手はきつと発話連鎖効力Ⅱを持つ共有の提示のよね③を用いたのであろう。この点を踏まえると、ね⑤は発話連鎖効力Ⅲの先行連鎖に区切りを付ける機能に最も近いように思われるが、その効力の度合いは非常に弱いことも同時に指摘しておく必要があるだろう。本研究ではね⑤の談話上における機能を「同意・共感表明のね⑤」と定義する。

4. 考察とまとめ

4.1 機能分類表のまとめ

以上の事例分析を通し、終助詞「ね」「よ」「よね」のモダリティ機能と発話連鎖効力の機能を考察し、談話上における機能として定義を行った。考察の結果、終助詞「ね」「よ」「よね」は、おおむね「要求型」「提示型」「表明型」の3通りの機能のタイプに分かれることが判明した。このような機能のタイプを見出したのは、命題内容の事柄の領域を捉えるモダリティ機能と発話連鎖効力を統合的に捉える分析の視点によるものである。

機能分類をまとめると以下の表2の通りである。なお、6つのデータから集めた「ね」「よ」「よね」の数は「ね」165回、「よ」73回、「よね」93回となる。表2の◇の中の数字は「ね」「よ」「よね」のそれぞれの機能が出現した数を示す。

表2 終助詞「ね」「よ」「よね」の談話上における機能

領域	発話連鎖効力Ⅰ 聞き手の後続発話を導く	発話連鎖効力Ⅱ 話し手自身の現在の連鎖を管理する	発話連鎖効力Ⅲ 先行連鎖に区切りを付ける
聞き手	情報の確認要求のね① 〈2回〉 コメントの受け入れ要求のね② 〈17回〉 (指摘による) 行動要求のよ① 〈0回〉		共有の表明のよね① 〈34回〉
話し手	情報・意思の受け入れ要求のね③ 〈103回〉 共有の受け入れ要求のよね② 〈31回〉	情報提示のよ② 〈39回〉	意思表示のよ③ 〈34回〉
中立	同意・共感要求のね④ 〈22回〉	共有の提示のよね③ 〈28回〉	同意・共感表明のね⑤ 〈21回〉

↓
要求型175回 (53%)

↓
提示型: 67回 (20%)

↓
表明型: 89 (27%)

西郷 (2012) では終助詞には聞き手の後続発話を導く発話連鎖効力があるとしており、本研究の結果をみても聞き手の後続発話を導く発話連鎖機能Ⅰ—「要求型」の機能が全体の53%を示しており、提示型20%と表明型27%に比べ圧倒的に多い結果となっている。西郷 (2012) の指摘は終助詞が持つ、より基本的な発話連鎖効力であったのではないと思われる。しかしながら、本研究では命題内容の事柄の領域によるモダリティ機能と発話連鎖効力を統合して考察した結果、発話連鎖効力には「強弱の度合い」が存在すること、更に話し手自身の後続発話にかかる「提示型」の発話連鎖効力と、一連の先行発話にかかる「表明型」の発話連鎖効力が存在することが新たに示唆された。

4.2 結合型「よね」の捉え方

本研究では結合型「よね」は、話し手が命題内容の事柄の領域をマークするモダリティ機能と発話連鎖効力を談話上における発話意図により柔軟に組み合わせた結果、結合型「よね」になるという捉え方を提案する。このような組み合わせによって構成される「よね」は「ね」と「よ」の機能をより多様に調整した終助詞として位置づけられる。以下表3は本研究における結合型「よね」の捉え方、「ヨ¹⁵⁾」と「ネ」がモダリティ機能と発話連鎖効力をそれぞれどのように分担して組み合わさっているかを示し、単独の「ね」「よ」との比較を行った結果である。

¹⁵⁾ 単独の「ね」「よ」と区別するために「よね」を構成する「ヨ」と「ネ」を片仮名表記をする。

表3 結合型「よね」の捉え方

	ヨが担う機能	ネが担う機能	「ね」「よ」との比較
共有の表明のよね①	表明系の発話連鎖効力 のよ③	聞き手領域のね②	コメントの受け入れ 要求のね②の緩和型
共有の受け入れ要求 のよね②	話し手領域のよ②	要求系の発話連鎖効力 のね③	情報・提示のよ②の 緩和型
共有の提示のよね③	提示系の発話連鎖効力 のよ②	中立領域のね④	同意・共感要求のね ④の強化型

まず、共有の表明のよね①は聞き手領域をマークするね②と、表明系の発話連鎖効力Ⅲのよ③が組み合わさった結合型である。共有の表明のよね①は一連の先行連鎖（やり取り）を基に、話し手が聞き手領域に対して言及する発話に用いられる。つまり、聞き手領域の事柄に対し、話し手はある程度把握した上での言及となる。そのため同じ聞き手領域をマークする「ね」と比較した場合、「不確かなこと」をマークする情報の確認要求のね①よりは、コメントの受け入れ要求のね②により近いように思われる。且つ、発話連鎖効力が主に先行発話にかかり、聞き手の受け入れを要求することなく、単に前の一連のやり取りに対する共有の表明に留まることから、コメントの受け入れ要求のね②より一步下がった緩和型と言えよう。

次に、共有の受け入れ要求のよね②は、話し手領域をマークするよ②、要求系の発話連鎖効力Ⅰのね③が組み合わさった結合型である。よね②がマークする話し手領域の事柄が持つ特徴は、よ②がマークする事柄と同じく話し手が確信を持つ情報である。且つ、話し手が自分の先行発話、または後続発話を通して、聞き手に容易に受け入れられるように、両者が共有可能な事柄になるように、発話を組み立てる特徴が際立つ。このような発話連鎖の特徴は聞き手に受け入れやすくする側面を持つと言える。それに加え聞き手に「受け入れ」を要求するね③を付けることから、情報提示のよ③の緩和型と言えよう。

最後に、共有の提示のよね③は、中立領域をマークするね④と、提示系の発話連鎖効力Ⅱのよ②が組み合わさった結合型である。よね③がマークする中立領域の命題内容は聞き手との共通経験、多くの人によって共有される一般常識等の事柄になることが多く、単独の同意・共感要求のね④と比べて命題内容の事柄には制限がある。共有の提示のよね③がマークする事柄は、いつ持ち出しても聞き手と共有可能な共通経験や一般常識といった中立領域の事柄だからこそ、話し手はその事柄をテーマにすぐに発話の展開を可能にすることができる。つまりモダリティ機能と発話連鎖効力が連動する形で現れている。聞き手の同意を受け、その後の展開が可能になる同意・共感要求のね④に比べると、話し手が直接談話を展開する点は、その強化型と言えよう。

4.3 「ね」と「よ」

最後に従来説明し切れなかった「ね」と「よ」について触れることで本稿を閉じたい。本研究のアプローチによると、従来の先行研究において使い分けの説明が困難だった「ね」と「よ」は話し手領域をマークする情報・意思の受け入れ要求のね③と情報提示のよ②及

び意思表示のよ③であったことが示唆された。以下、その使い分けについていくつかポイントを指摘しておく。

(1) 情報・意思の受け入れ要求のね③と情報提示のよ②の違い

まず、情報を提供する発話において情報・意思の受け入れ要求のね③がマークする情報は話し手自身も完全に持っているとは言えない「不完全な情報」、または今その場で思い出しつつ、整理しつつ提示する必要がある情報といった特徴が強い。一連の情報提供をみるとそのつながりは関連性が深く、情報を徐々に具体化していくといった展開を成す（3章の事例5）。このような情報提供において話し手側は聞き手の受け入れのサインが必要となり、「受け入れ要求」の発話連鎖効力が働く。

次に、情報を提供する発話において情報提示のよ②がマークする情報は話し手が完全に持っている確信のある情報である特徴が観察された。話し手はよ②でマークした情報を徐々に具体化していくというよりは、次々と順追って提示していくという特徴が際立つ。そのため、一連の情報は必ずしも繋がりを持ったものでなくても良く、性質的に異なる情報を一方的に話題に導入して提示することもある（3章の事例7）。このような情報提供においては、話し手側は聞き手の受け入れのサインは必要がなく、話し手側から直接「受け入れさせる」発話連鎖効力が働く。

その意味で情報提示のよ②は一連の情報提供において「よ」自身が発話権維持を示す注意喚起としての機能も持つと考えることができる。一方、情報・意思の受け入れ要求のね③は発話連鎖効力によって聞き手に働きかける必要がある。情報・意思の受け入れ要求のね③がしばしばイントネーションを伴うことも、聞き手に働きかける発話連鎖効力を強めるためであろう。

(2) 情報・意思の受け入れ要求のね③と意思表示のよ③の違い

以下用例「よ」と「ね」のどちらを用いても良い例として先行研究（滝浦2008等）で良く挙げられるものである。

家を出かけながら「ちょっと郵便局行ってくるね/よ」（滝浦 2008 より）

「郵便局行ってくる」は話し手領域の事柄である。したがって「ね」が用いられる場合は情報・意思の受け入れ要求のね③、「よ」だと意思表示のよ③になる。このような場面で「ね」がより優先的に選択されるのは、話し手が「ちょっと郵便局行ってくる」という自分の意思を聞き手に受け入れてもらうことを要求する、即ち聞き手の後続発話を導く発話連鎖効力Ⅰのね③がより適切となる。一方、「よ」を用いると意思表示のよ③が有する発話連鎖効力Ⅲの先行連鎖に区切りを付ける機能が働き、話し手が単に「郵便局に行ってくる」という事実以上のことを表明するニュアンスが生じる。

4.4 今後の課題

本研究では母語場面の自然会話における終助詞「ね」「よ」「よね」の談話上における機能分類を行った。今後の課題としては本研究における終助詞「ね」「よ」「よね」の機能分類を日本語教育に還元するために、接触場面の会話データの分析に応用していく必要がある。従来非母語話者の終助詞使用の問題点が度々指摘されてきたが、その問題の所在につ

いてはまだ明らかにされていない部分が多い。本研究で提案するモダリティ機能と発話連鎖効力の機能を統合した機能分類を基に、非母語話者の終助詞使用における問題の所在を明らかにしていきたい。

参考文献

- 陳常好（1987）「終助詞一話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞」『日本語学』6(10) pp. 93-109 明治書院
- 片桐恭弘（1995）「終助詞による対話調整」『言語』第24巻11号 pp. 38-45 大修館書店
- 加藤重広（2001）「文末助詞『ね』『よ』の談話構成機能」『富山大学人文学部紀要』第35号 pp. 31-48
- 神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論一言語の機能的分析一』大修館書店
- 金水敏（1993）「終助詞ヨ・ネ」『言語』第22巻4号 pp. 118-121 大修館書店
- 金水敏・田窪行則（1998）「談話管理理論に基づく『よ』『ね』『よね』の研究」『音声による人間と機械の対話』（堂下修司・新美康永・白井克彦・田中穂積・溝口理一郎編）pp. 257-271 オーム社
- 高民定（2011）「日本語学習者の「よ」「ね」「よね」について—日本語初級・中級教科書の機能分析を中心に」『国際教育』4 pp. 11-23 千葉大学国際教育センター
- 鈴木睦（1997）「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』くろしお出版
- メイナード（1993）『会話分析』くろしお出版
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
- 大曾美恵子（1986）「誤用分析1『今日はいい天気ですね』—『はい、そうです』」『日本語学』5(9) pp. 91-94
- 大曾美恵子（2005）「終助詞「よ」「ね」「よね」再考—雑談コーパスに基づく考察—」『言語教育の展開』pp. 2-15 ひつじ書房
- 崔英才（2015a）「日本語母語場面における終助詞「ね」の一考察」『千葉大学人文社会科学研究紀要』第30(号) pp. 187-198
- 崔英才（2015b）「日本語母語場面における終助詞「よ」の一考察—発話連鎖効力に基づく分析枠組みの試み—」『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』第292集 pp. 31-44
- 西郷英樹（2012）「終助詞「ね」「よ」「よね」の発話連鎖効力に関する一考察：談話完成タスク結果を基に」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』22 pp. 97-118
- 滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社
- 宇佐美まゆみ監修（2011）『BTSJによる日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011年版』